

采女

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
三月	大和	采女	前に同じ		里女	旅僧	

「是は諸国一見の僧にて候。我此程は都に候ひて。

洛陽の寺社残りなく拝み廻りて候。又是より南都に参らばやと思ひ候。

サシ
「頃は弥生の十日余り。花の都を旅立ちて。まだ夜をこめて東雲の。

道行
「影ともに。我も都を下り月。く。残る朝の朝霞。深草山の末つゞく。木幡の関を今朝越えて。宇治の中宿井手の里。過ぐれば是ぞ奈良坂や。春日の里に着きにけり。く。

詞
「急ぎ候ふ程に。春日の里に着きて候。心静かに社参申さばやと思ひ候。

サシ
「宮路正しき春日野の。く。寺にもいざや参らん。更闌け夜静かにして。四所明神の宝前に。耿々たる灯も。世を背けたる影かとて。共に憐む深夜の月。朧々と杉の木の間を洩りくれば。神の御心にも。若く物なくや思すらん。

下歌 「月に散る。花の陰行く宮廻り。

上歌 「運ぶ歩みの数よりも。く。積る桜の雪の庭。又
色添へて紫の。花を垂れたる藤の門。明くるを春
の景色かな。く。

ワキ詞 「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「見申せばこれ程茂りたる森林に。重ねて木を植ゑ
給ふ事不審にこそ候へ。

シテ 「さては当社始めて御参詣の人にて御入り候ふか。

ワキ 「さん候始めて此所に参りて候。当社の謂委しく御
物語り候へ。

シテ 「そもそも当社と申すは。神護景雲二年に。河内の
国平岡より。此春日山本宮の峰に影向ならせ給ふ。

されば此山。もとは端山の陰浅く。木陰一つもな
かりしを。陰頬まんと藤原や。氏人よりて植ゑし
木の。もとより恵み深き故。程なくかやうに太山

となる。然れば当社の御誓ひにも。人の参詣はうれしけれども。木の葉の一葉も裳裾に着きてや去りぬべきと。惜しみ給ふも何故ぞ。人の煩ひ茂き木の。陰深かれと今も皆。諸願成就を植ゑ置くなり。されば慈悲万行の日の影は。三笠の山に長閑にて。五重唯識の月の光りは。春日の里に隈もないし。

下歌地 「陰頼みおはしませ。唯かりそめに植うるとも。草

木国土成仏の。神木と思し召し。あだにな思ひ給ひそ。

上歌

「あらかねの其始め。く。治まる国は久方の。あめはゝこぎの縁より。花開け香残りて。仏法流布の種久し。昔は靈鷲山にして。妙法華経を説き給ふ。今は衆生を度せんとて。大明神と顕はれ。此山に住み給へば。鷲の高嶺とも。三笠の山を御覧ぜよ。さて菩提樹の木陰とも。盛なる藤咲きて。

松にも花を春日山。長閑けき陰は靈山の。淨土の
春におとらめや。／＼。

シテ詞
「如何に申し候。猿沢の池とて隠れなき名池の候ふ
を御覧ぜられて候ふか。

ワキ詞
「承り及びたる名池にて候ふ御教へ候へ。

シテ
「此方へ御出で候へ。是こそ猿沢の池にて候へ。又
思ふ子細の候へば。此池の辺にて。御経を読み仏
事をなして賜はり候へ。

ワキ
「やすき間の事仏事をばなし申すべし。さて誰と志
して回向申し候ふべき。

シテ
「是は昔し采女と申しゝ人。此池に身を投げ空しく
なりしなり。されば天の帝の御歌に。吾妹子が寐
ぐたれ髪を猿沢の。池の玉藻と見るぞ悲しきと。
よめる歌の心をば。知ろし召され候はずや。

ワキ
「実にく此歌は承り及びたるやうに候。委しく御
物語り候へ。

シテ「昔し天の帝の御時に。一人の采女有りしが。采女

とは君に仕へし上童なり。始めは覗慮浅からざりしが。程なく御心変りしを。及ばずながら君を恨

み参らせて。此池に身を投げ空しくなりしなり。

ワキ「實にくく我も聞き及びしは。帝あはれと思し召し。此猿沢に御幸なつて。

シテ「采女が死骸を覗覧あれば。

ワキ「さしもさばかり美しかりし。

シテ「翡翠のかんざし嬢娟の鬢。

ワキ「桂の黛。

シテ「丹花の唇。

ワキ「柔和の姿引きかへて。

二人「池の藻屑に乱れ浮くを。君もあはれと思し召して。

地「わぎもこが。寝ぐたれ髪を猿沢の。くく。池の玉藻と見るぞ悲しきと。覗慮に懸けし御情。かたじけなやな下として。君を恨みしはかなさは。た

とへば及びなき。水の月取る猿沢の。生ける身と思すかや。私は采女の幽霊とて。池水に入りにけり。池水の底に入りにけり。（中入）

ワキ歌
「池の波。夜の汀に坐をなして。く。仮に見えつる幻の。采女の衣の色々に。弔ふ法ぞまことなる。く。

後ジテ
「有難や妙なる法を得るなるも。心の水と聞く物を。さわがしくとも教へあらば。浮ぶ心の猿沢の。

池の蓮の台に座せん。よくく弔ひ給へとよ。

ワキ
「不思議やな池の汀に顕はれ給ふは。采女と聞きつる人やらん。

シテ詞
「恥かしながらいにしへの。采女が姿を顕はすなり。仏果を得しめおはしませ。

ワキ
「もとよりも人々同じ仏性なり。なに疑ひも波の上。

シテ
「水の底なる鱗や。

ワキ
「乃至草木国土まで。

シテ
「悉皆成仏。」

ワキ
「疑ひなし。」

地
「ましてや人間に於てをや。龍女が如く我もはや。
变成男子なり。采女とな思ひ給ひそ。しかも所は
補陀洛の。南の岸に至りたり。是ぞ南方無垢世界。
生まれん事も頼もしや。く。」

地クリ
「實にやいにしへに。奈良の都の代々を経て。神と
君との道すぐニ。國家を守る誓ひとかや。」

シテサシ
「然れば君に仕へ人。其品々の多き中に。
地
「わきて采女の花衣の。裏紫の心を碎き。君辺に仕
へ奉る。」

シテ
「されば世上に其名を広め。」

地
「情内にこもり。言葉外に顯はるゝためし。世以て
類多かりけり。」

クセ
「葛城の王。勅に従ひ陸奥の。忍ぶもぢずり誰も
皆。こともおろそかなりとて。設けなどしたり

けれど。猶しもなどやらん。王の心解けざりしに。

采女なりける女の。土器取りし言の葉の。露の情に心解け。叡感以て甚し。されば浅香山。影さへ見ゆる山の井の。浅くは人を思ふかの。心の花開け。風もをさまり雲静かに。安全をなすとかや。
「然れば采女の戯ぶれの。

シテ

地「色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影も廻るや盃の。御遊の御酒の折々も。采女の衣の色添

へて。大宮人の小忌衣。桜をかざす朝より。今

日も呉織。声の綾をなす舞歌の曲。拍子を揃へ袂をひるがへして。遊楽快然たる。采女の衣ぞ妙なる。取り分き忘れめや。曲水の宴の有りし時。御土器度々廻り。有明の月更けて。山時鳥誘ひ顔なるに。叡慮を受けて遊楽の。月に鳴け。
（序の舞）
シテワカ
「月に鳴け。同じ雲井の時鳥。

地「天つ空音の万代までに。

シテ
「万代と。限らじ物を天衣。撫づとも尽きぬ巖なら
なん。松の葉の。

地
「松の葉の。散り失せずして。正木のかづら長く伝
はり。鳥の跡絶えず。天地おだやかに。国土安穩
に。四海波静かなり。

シテ
「猿沢の池の面。

地
「猿沢の池の面に。水滔々として。波又悠々たりと
かや。石根に雲起つて。雨はそようようを打つなり。

遊樂の夜すがら是れ。采女の戯ぶれと思すなよ。
讃仏乗の因縁なる物を。よく弔はせ給へやとて。
又波に入りにけり。又波の底に入りにけり。